

学士（修士）論文

要旨

社会システム研究科 文化言語専攻
土谷 裕紀子

本稿では、新選組をめぐるファンコミュニケーションの現在を明らかにすることを目的としている。

一般的に人々が新選組に触れるのは、教科書でも史実研究の成果でもなく創作物を通してだといえるだろう。新選組のイメージは、創作史とそれを形にするメディアの変遷の中で形成され、ファンに受容されている。それらを踏まえ、新選組イメージの受容について、二つの画期に注目しつつ、ファンコミュニケーションの特徴とそれをめぐるコミュニケーションのあり方を明らかにしていく。

本稿は、3章で構成されている。第1章では、新選組をめぐる創作物の変遷を概観し、二つの転換期を明らかにしている。新選組の創作は、60年代後半から70年代前半の司馬作品のテレビドラマ化で一度目の転換期を迎える。司馬作品をきっかけに、それまで剣戟作品に見られなかった女性ファンが生みだされ、少女マンガなどで新選組の物語が受容されていくようになった。さらに、2004年の大河ドラマ『新選組!』の放映により二度目の転換期を迎え、盛り上がりを見せている。『新選組!』は、子母沢や司馬によって脈々と築かれてきた新選組の物語と設定を選別し、新たな隊士の設定を追加したことで従来の新選組イメージから離れることに成功した。『新選組!』をきっかけとして、多様なジャンルで作品が生まれ、新たな設定が作られたり、それまであまり注目されてこなかった隊士への関心も高まったりしていく。

第2章では、第1章で述べた二つの転換期におけるファンのコミュニケーションについて論じている。ファンのコミュニケーションツールとしてファンノートとソーシャルメディアを挙げ、分析を行った。ファンノートについては、60年代後半ごろの記述と『新選組!』以降の記述を比較し、その違いからファンの自己表明のあり方を考察した。ファンノートは、新選組ゆかりの史跡や施設に設置されたノートを指しており、特に、沖田総司の墓のある専称寺と日野市立新選組のふるさと歴史館、新選組記念館、新選組隊士の墓や近藤の遺髪塔のある壬生寺に設置されたノートを中心に扱っている。

また、ソーシャルメディアとしては、『新選組!』の放映と同時期にサービスを展開し、当時、先駆的な存在であった mixi と今日の新選組ファンの交流に欠かせない存在となっている Twitter を取り上げ分析し、考察を行った。特に、mixi は、複雑かつ多様になっている新選組ファンの関心を可視化するうえで格好の研究対象である。細分化されていくコミュニティのあり方に注目し、『新選組!』以降のファンコミュニケーションの全体像を把握

したい。

第3章では、第2章を踏まえて、現在の新選組ファンコミュニケーションを検討し、ファンのタイプを分類した。新選組ファンのコミュニケーションは、時代を経るごとに変遷していく創作とそれに伴うファンの趣味趣向の変容とともに、ひとりひとりのファンが抱えている関心や解釈の衝突を回避していくあり方へと移行している。ファンノートとソーシャルメディアの両方に衝突を回避していく交流のあり方を見出すことができた。ファンノートでは、ファン同士の新選組イメージの共有認識が希薄になったことでそれまで共有していた一体感が薄れている。一方で、さまざまなファンが集う条件の中、儀礼的な文言での交流に変容したことで、ファン同士の関心や解釈の違いによる衝突を回避していると見受けられる。また、ソーシャルメディアは、細分化によりファン同士の関心や解釈の違いによる衝突を回避し、同じ趣味趣向を共有することで共通認識を持ち一体感を味わう場として機能している。これらを前提とし、ファンの受容のタイプを史実、創作という観点から分類した。史実愛好タイプ、史実と創作愛好タイプ、創作のみの愛好タイプで分けることができ、ファンが自身のタイプを無意識に受け止め、それに見合ったコミュニケーションの場を築いていることが検討できた。

本稿では、現在の新選組ファンコミュニケーションにファンの多様化した関心が衝突し合うことを周到に避けつつも、繋がりたいという欲求を満たしたいという傾向が見出された。それがメディア環境の支えのなかで可能になっていると結論付けた。